E－18 住まいの清浄に関する研究（第1報）

ライオン家研　福岡満里子　○小林敏子　久保田隆之　近藤邦成

目的　建物は時代によって自然に汚れて行くものであるが，人それぞれ，生活の中の住まいは，常に真新らしい状態であってほしいと願うものである。そこで，演者らは，住まいの清浄に関する研究の一環として，衛生学的見地から，住まいの細菌汚染実態を予備的に調査した。

方法　昭和46年5月から7月に渡り，20世帯を対象に住まいの各部を，滅菌ガーゼで拭き，滅菌緩衝食塩水（pH = 7.0）で抽出後，普通寒天培地及びデスオキシコーレート培地を用い，37°Cで48時間培養後，生じた生菌及び大腸菌群の集落を測定した。又，掃除方法の違いによる除菌効果の検討も併せて行なった。

結果　住まいの細菌汚染は，各世帯及び検査場所により異なるが，最も汚染度の大きい場所は，タタミ，じゅうたん及び調理用具類を収納して置く棚等で，100cm²当り生菌数：約10^6，大腸菌群：約10^3認められ，比較的汚染度の小さい壁，窓等においては，生菌，大腸菌群ともに約10^2汚染されている事が認められた。

又，タタミを用いた掃除方法の違いによる除菌効果を調べた結果，電気掃除機などよりも，拭き掃除をする方法の方が除菌効果が大きい。

いずれにしろ住まいの各部は細菌で汚染されており，洗剤を使用した拭き掃除をする事を心掛ける必要があろう。